



| | |
|--------------|---|
| Title | ひととひととの関係性からみた自閉症スペクトラム —アスペルガー症候群と診断された青年との歩みから — |
| Author(s) | 永浜, 明子 |
| Citation | 大阪大学, 2018, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69707 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

| | |
|---|--|
| 氏 名 (永 浜 明 子) | |
| 論文題名 | ひととひととの関係性からみた自閉症スペクトラム ーアスペルガー症候群と診断された青年との歩みからー |
| <p>【本論文の目的と意義】</p> <p>本論文では、筆者と自閉症スペクトラムと診断されたA氏との歩みから、A氏の外部に表出される事象やA氏のうちにある現象、および自閉症スペクトラムの診断基準とされ、A氏にも一部みられる特性の解明を試み、自閉症スペクトラムが、ひととひととの〈間の障がい〉であることを導く。</p> <p>本論文の目的を達成するために、三つの観点から論じる。一つ目は、自閉症概念および原因論の変遷を概観し、自閉症が未だ定まらない、未解明なものであることを確認する。二つ目は、A氏の外部に表出される事象、およびそのときにA氏のうちにある現象を詳細に検討し、それらの事象や自閉症スペクトラムの特徴とされ、A氏にも一部みられる特性が、ひととひととの関係においてしか存在しないことを導く。最後に、筆者とA氏という同一のひとでありながら、その二者の関係性により、A氏の外部に表出される事象、A氏のうちにある現象、およびA氏の特性が変化するのみならず、筆者のあり様、A氏のあり様に変化し、A氏が自閉症スペクトラムのA氏ではなく、個としてわきたつことを論じる。これら三つの観点から、閉症スペクトラムがひととひととの〈間の障がい〉であることを明示する。</p> <p>本論文のように、8年以上の長きにわたり、自閉症スペクトラムのあるひとのあり様やその変化を、具体的・詳細に捉えた研究は見当たらない。筆者からのインタビューではない、二者の繰り返される対話から得られた本論文でのさまざまな示唆は、A氏のような特性をもつひと、あるいは筆者のような周囲のひとに役立つと考えている。</p> <p>【研究協力者および研究方法】</p> <p>本論文の協力者は、大学3回生の初夏に、自閉症スペクトラム（診断当時は、高機能広汎性発達障害：アスペルガー症候群）と診断され、2014年9月に教育系大学を卒業した28歳の女性、A氏である。また、同時に筆者とA氏とのかわりをテーマとする本論文では、筆者自身も研究の対象である。</p> <p>本論文は、筆者とA氏との対話が軸となっている。対話は、2015年1月から現在まで実施しており、その回数は数百回以上となり数えることができない。対話の具体的な方法は、A氏が、A氏の外部に表出される事象や具体的なシーン、そのときにA氏のうちにある現象、それらに伴う心情を語り、その内容について筆者がさらに質問し、より詳細な語りを促す。また、語られた内容に関連する、当時の筆者およびA氏のメモや記録、A氏の走り書きや日記、数百通におよぶ二者のメールのやり取りも参考にしている。分析方法は、対話から得られた内容を文字化・文章化し、筆者とA氏それぞれが分析、解釈後、筆者とA氏両方で検討するプロセスをとっている。対話により得られた内容に関し、二者の感じ方、分析の結果、解釈にズレが生じる場合は、さらに対話を重ね認識の統一を図るが、最後まで意見の一致が見られない場合には、そのまま残している。本論文では、表出されたことばやA氏に現れる事象から類似性を整理し、カテゴリー化する手法はとらず、実際に生じた現象をできる限り〈ありのままの状態〉で検討する手法を採用した。</p> <p>対象者は、筆者およびA氏両者であるが、互いが同意書を交わし、研究を進めてきた。また、「立命館大学ひとを対象とする医学系研究倫理審査委員会」（承認番号BKC-人-2014-021、BKC-人-2015-029）の承認を受けている。</p> <p>【各章の要旨】</p> <p>第1章：臨床哲学のなかでの本論文の位置づけを考え、筆者とA氏にとっての〈二者の臨床哲学〉を、〈筆者とA氏とが〈共に〉、A氏の生きづらさ軽減という臨床、すなわち日常において、〈対話〉を積み重ね、〈個〉としてのA氏をより具体的に浮かびあがらせることから、ひととは何かを問い、模索し続ける営み〉と定義した。また、筆者とA氏との歩みにおける当事者がA氏、筆者の両者であり、その二者が行う〈二者の当事者研究〉の意味を確認した。</p> <p>第2章：自閉症の概念を概観した。自閉症の出現は、1938年にアスペルガーの自閉的精神病質とする症例、1944年にカナリーの最早期の児童精神分裂病とする症例の提示に始まる。その後、ラターらが、日本でも独自に小澤が、自閉症の一次的障害を言語・認知障害とする説を発表した。今日では、脳の器質障害にその原因を求め、生物学的研究が盛んに行われている。その一方で、関係発達や自我形成の視点から捉えた自閉症の本質の解明も提起されている。</p> | |

第3章：筆者とA氏との歩みの歴史を説明した。次に、A氏が診断を受けた後、音声での会話ができなくなった筆者とA氏が用いた交換日記の中の表現から、診断後のA氏のあり様を考察し、幼少期に見逃され、成人期を迎えたひとが、障がいがあると診断されることの重さ、ショックの大きさについて述べた。また、発達障がいの多くの人に共通する音声による感情交流の難しさ——時間がかかるという意味において——を補充するために交換日記が有用であることを示した。この交換日記は、筆者とA氏、互いが深く傷つく中、二者の関係を絶たない、A氏自身の生き方を決め、共有するために大きな役割を果たした。また、あらためて、A氏を〈自閉症スペクトラムのA氏〉ではなく、A氏という〈一人のひと〉としてみる出発点となり、この交換日記から筆者とA氏との新しい関係が始まったともいえる。

第4章：修学におけるA氏の〈困り〉について考察した。診断後、〈自閉症スペクトラムの特徴〉にとらわれ、自身の行為や行動の一つひとつが、自閉症スペクトラムの特徴と一致するかしないかの選別を繰り返していたA氏が、修学において、現実困っている具体的な事象を注視し、発信しやすい、〈困り〉ということばの選択プロセスについて述べた。次に、修学場面におけるA氏の〈困り〉の具体的事象、A氏のうちにある現象を詳細に検討した。自閉症スペクトラムの特徴の一つは、他者との関係の中で生じる障がいであるとされるが、A氏の外部に表出される事象としての〈困り〉は、他者が介入する以前問題、すなわち、A氏のうちに生じ、存在する現象としての〈困り〉に起因することを明示した。また、修学を妨げる要因に対する対処・対応をより具体的にするためには、自閉症スペクトラムの特性に目を奪われるのではなく、具体的な〈困り〉およびその内実に向けようとすることの重要性を提示した。

第5章：最初に、日常生活における〈困り〉に対する筆者とA氏との認識のズレを確認した。次に、そのズレの要因が、時間枠の捉え方とことばの結びつき、時間の経過に伴う事象に対する意識・認識の希薄化における、筆者とA氏との異なりであることを明らかにした。また、ことばに対する二者の了解・共有について述べた。了解・共有のプロセスには、時間を要するが、筆者のものでもA氏のものでもない新しい認識や価値観を互いが了解・共有しない限り、A氏の〈困り〉の事象や生きづらさ軽減のための対処・対応は見えてこないことを確認した。さらに、日常生活におけるA氏の〈困り〉とその対処・対応を詳細に検討した。修学場面に比べ、日常生活では〈困り〉への対処・対応がより難しい理由を検証した。修学場面は限られた空間と時間であり、生じるできごととも有限である一方、日常生活は、空間も時間も無限であり、生じるできごととも数えきれないゆえ、A氏の〈困り〉は幅広く、その対処・対応が困難であることを明らかにした。その上で、A氏にとって、同じ、あるいは類似した事象であっても、異なる場面ではまったく別の事象として認識され、それへの対処は、自然には身につかず、新たに対処・対応を考える必要があることを述べた。

第6章：筆者とA氏との四つの関係性について述べた。教員と学生の関係から移行した〈一方向の関係〉は、筆者からA氏へ向いた行為・行動であり、一般的な意味での支援であった。支援する側の筆者には、責任という重圧感、緊張感がのしかかり、支援される側のA氏には、自身を卑下する感情、してもらえばかりの負い目が強く残った。〈双方向の関係〉は、筆者からA氏に向く矢印は、A氏の行為・行動に対する指摘、A氏からのSOSや相談に対する筆者の呼応や反応で、一方から始まった矢印が他方へ返るといった意味合いが強いが、A氏は、徐々に筆者の促す言葉の意味を自身で考え、行動しようとする姿勢に変化した。この関係性は、A氏の自身の気持ちをことばで他者に伝えたいという欲求を生んだ。現在のあり様の〈共歩〉は、A氏の意向や希望、幸せが、筆者とA氏との生活の最たる軸となる。自然な対話を重ねた上で、さまざまなことを決める関係性、何の条件もなく、支援という行為・行動の有無や物理的な距離にかかわらず、〈共にいる〉ことが核となることを、互いが認識するあり様である。表面的な行為・行動は変わらないが、傲慢にも一人で担ってきたつもりの責任を放棄し、新たな責任をA氏と共に背負うことが、支援する側の筆者、支援される側のA氏から、支援という呪縛を解き放ち、A氏は、自身の未来をイメージするに至っている。筆者とA氏という同一のひとでありながら、二者の関係性の変化により、A氏というひとのあり様も変化する。

第7章：まず、A氏の外部に表出されるさまざまな諸事象、あるいはA氏のうちにある諸現象の一つひとつが、A氏の〈困り〉そのものではないことを確認し、〈困り〉の本質が、過剰な自己否定や卑下を誘発する感情の乱れ、およびそのコントロールの難しさであることを明らかにした。〈困り〉の本質への対処・対応には、対話をはじめとする六つの基軸があり、それらすべてに共通することは、筆者とA氏が〈共にある〉というあり様、および最終的なA氏自身による納得と実行である。次に、自閉症スペクトラムの特徴とされ、A氏にもみられるいくつかの特性を取り上げ、一つひとつの行為や行動には理由と意味があることを明示した。また、A氏の〈困り〉としての事象・特性は、A氏が安心できる他者との関係においては、軽減あるいは消失させようすることを明示し、脳の器質障がい説の限界に言及した。

終章：自閉症スペクトラムのあいまいさ・不確かさ、ひととひととの関係において生じた、A氏の〈困り〉やA氏の特性の軽減・消失、ひととひととの関係性の変化に伴うA氏というひとのあり様の変化を基に、自閉症スペクトラムは、ひととひととの関係が出現させる〈人間関係〉の一つであり、ひととひととの〈間の障がい〉であると結論づけた。また、本論文が、日々変化し続けている、〈今の〉A氏を捉えられていないという本論文の限界について述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 (永 浜 明 子) | | | |
|-------------------|-----|----------|-------|
| | (職) | 氏 名 | |
| 論文審査担当者 | 主 査 | 大阪大学 教授 | 浜渦 辰二 |
| | 副 査 | 大阪大学 教授 | 堀江 剛 |
| | 副 査 | 立命館大学 教授 | 長積 仁 |
| 論文審査の結果の要旨 | | | |
| 以下、本文別紙 | | | |

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ひととひととの関係性からみた自閉症スペクトラム
—アスペルガー症候群と診断された青年との歩みから—

学位申請者 永浜 明子

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 浜渦 辰二
副査 大阪大学教授 堀江 剛
副査 立命館大学教授 長積 仁

【論文内容の要旨】

本論文は、筆者と自閉症スペクトラムと診断された A 氏との歩みから、自閉症スペクトラムの診断基準とされ、A 氏にも一部見られる特性の解明を試み、自閉症スペクトラムが、ひととひととの〈間の障がい〉であることを導こうとするものである。その目的のために、1) 自閉症概念および原因論の変遷を概観し、自閉症が未解明なものであることを確認し、2) 自閉症スペクトラムの特徴とされ、A 氏にも一部見られる特性が、ひととひととの関係においてしか存在しないことを導き、3) 筆者と A 氏という二者の関係性により、A 氏とともに筆者のあり様も変化し、A 氏が個としてわきたつことを論じる、という 3 つの観点から論じている。

第 1 章「臨床哲学と当事者研究のなかでの本論文の位置づけ」では、筆者と A 氏にとっての〈二者の臨床哲学〉を、筆者と A 氏がともに、A 氏の生きづらさの軽減という臨床（日常）において、対話を積み重ね、個としての A 氏を具体的に浮かび上がらせることから、人とは何かを問い模索し続ける営みと定義し、またそれを〈二者の当事者研究〉とも呼んだ。

第 2 章「自閉症概念の変遷」では、1938 年にアスペルガーが自閉的精神病質とする考え、1944 年にカナーが最早期の児童精神分裂病とする考えを提示し、その後、ラターらが言語・認知障害とする説を発表した。今日では、脳の器質障害に原因を求めた生物学的研究が盛んであるが、その一方で、関係発達の視点から捉えた自閉症の解明も提起されていることをまとめた。

第 3 章「筆者と A 氏との歩みの歴史と交換日記」では、診断を受けた後、音声での会話ができなくなった A 氏と筆者が始めた交換日記のなかから、診断後の A 氏のあり様を考察し、幼少期に見逃され、成人期を迎えたひとが、障がいがあると診断されることの重さ、ショックの大きさについて考察した。

第 4 章「修学における A 氏の〈困り〉」では、修学において現実困っている具体的な事象を注視し、〈困り〉ということばの選択プロセスについて述べ、A 氏の〈困り〉の具体的な事象を検討し、それが A 氏のうちに生じ存在する現象としての〈困り〉に起因することを示した。

第 5 章「日常生活における A 氏の〈困り〉」では、日常生活における〈困り〉に対する筆者と A 氏の認識のズレを確認し、二者の了解・共有がないと、A 氏の〈困り〉の事象や生きづらさ軽減のための対処・対応は見えてこないことを確認し、修学場面に比べ、日常生活では〈困り〉への対処・対応がより難しい理由を検証した。

第6章「筆者とA氏の関係性の変化」では、筆者とA氏の関係性の変化を、①教員と学生の関係、②筆者からA氏へ向いた一方向の関係、③筆者からA氏に向く矢印とともに、A氏は徐々に自身で考え行動しようとした双方向の関係、④共に判断し共に決断し共に責任を負うという〈共歩〉、という4段階の変化を分析した。

第7章「自閉症スペクトラムの再考」では、A氏の〈困り〉の本質は、過剰な自己脾経や卑下を誘発する感情の乱れとそのコントロールの難しさであることを明らかにするとともに、自閉症スペクトラムの特徴とされ、A氏にもみられるいくつかの特性と取り上げ、一つひとつの行為や行動には理由と意味があることを明示し、脳の器質障害説の限界に言及した。

終章では、以上の考察から、自閉症スペクトラムは、ひととひととの〈間の障がい〉であると結論づけた。

なお、この研究は、著者の所属する立命館大学の「ひとを対象とする医学系研究倫理審査委員会」の承認を得たうえで行われたものである（承認番号「BKC-人-2014-021」および「BKC-人-2015-029」）。

全体の分量としては、A4判横書きで191ページ、400字詰め原稿用紙に換算して、約630枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、9年にわたるA氏との関係性のなかで形作られて来た「二者の臨床哲学」、あるいは、綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法—同じでもなく違うでもなく』（2010年）とも異なる「二者の当事者研究」というオリジナリティのある研究方法により、自閉症スペクトラムを「ひととひとの間の障がい」としての明確な主張をもった論文である。ただし、この主張は諸刃の剣であり、ひととひとの間の障がいである限り、一方のA氏の側だけに障がいを帰すわけではなく、他方の筆者の側にも何らかの契機があり、A氏が〈困り〉に対処・対応するには、A氏だけが変わればよいのではなく、筆者の側でも何かが変わらないといけないとし、実際に、筆者とA氏は共に歩むことで共に変わって来ていると言う。その意味で、筆者ののっぴきならない仕方での研究生活を賭けた重みのある論文になっている。

公開審査会では、「ひととひとの間の障がい」としての主張と、A氏の外部に表出される事象と、そのときにA氏の内にある現象とを区別する議論との間に齟齬があるのではないかと、哲学的な諸テーマ（例えば、客観主義と「生活世界の意味」を問う現象学的視点、「言葉による名付け」など）を含む点で、従来の医学・障害福祉論の議論よりもさらに踏み込んだものであるが、「人称性」に関してやや踏み込みが足りないのではないかと、「障がい」という言葉を無意味化しようとする主張と、「二者の関係性」からしか論じられない「当事者研究」に着手したことは、チャレンジングであり、独創的と思われるが、マイノリティに対する無関心、偏見、差別などが見過ごされがちな社会に対するメッセージとして、論証した意味や価値を一般化するという視点が盛り込まれてもよかつたのではないかと、といった疑問が出された。

しかし、これらの疑問は、今後取り組むべき課題を示すものであり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が、「二者の臨床哲学」あるいは「二者の当事者研究」という独自のアイデアを展開してみせたという点において、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。